

単伝庵（らくがき寺）

単伝庵は、らくがき寺、つまり「落書きの寺院」として有名な小さな仏教寺院です。この寺院の大黒天像を安置するために新しいお堂が建てられたとき、大黒天に願い事をより良く見てもらえるようにするために、内壁に直接願い事を書くことが習慣になりました。これは、絵馬と呼ばれる小さな木製の平板に願い事を書いて神社や寺院のお堂の外に掛けるという、より一般的な習慣の代わりとなるものです。僧侶たちは新年に備えて 12 月下旬に壁を塗り直すので、新年になると参拝者は再び手つかずの白い壁に書き始めることができます。

単伝庵の起源は不明ですが、現存する記録によると、1711 年に臨済宗妙心寺宗派の僧侶である瑞応（1664～1734）によって再建されました。この寺院は何度か移転され、20 世紀初頭には荒廃してしまいました。新たに任命された住職は托鉢を行い、1957 年に新しい大黒堂ができ、寺は復興しました。

お堂に安置されている小さな像は、財福の神様であり七福神の一柱である大黒天を表現しています。この像は、走り大黒、つまり「走っている大黒天」と呼ばれていますが、それはこの大黒天が足を踏み出しているように彫られているためです。大黒天は大きな袋を背負い、木槌を手に持っており、その両方が繁栄を象徴しています。寺の伝説によると、この像は、著名な武士・武将である楠正成（1294？～1336）が戦の勝利を祈願して近隣の石清水八幡宮に寄進した楠木の一部から作られました。

大黒堂の他に、この寺院には 2 階建ての本堂があり、そこでは本尊である近年に作られた釈迦牟尼仏像と、慈悲の菩薩である観音菩薩の像を安置しています。観音菩薩像は、200 年以上も単伝庵で保管されています。地蔵堂は、生命のある全てのものの救世主である地蔵菩薩を祀っており、この寺院の手入れの行き届いた庭には、他にもいくつか小さな祭壇が安置されています。

単伝庵は土・日・年末年始に参拝のため公開されています。平日は、電話での事前予約により団体での参拝が可能です。お問い合わせは日本語のみでの受付となりますので、ご注意ください。